

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】
2021年度 最優秀園
京都市立明德幼稚園

本園が、園と地域の自然環境に主体的に関わる子どもたちの姿を通して、人との繋がりや対話によって深まる好奇心・探究心・思考に着目し、焦点化して研究されていることは、大変興味深い取り組みです。特に、子どもたちが思考を深める過程を探究し、「比較による思考の深め方」に気づいた点は、「科学する心」を理解する上でも大変に重要です。

子どもたちが、オオムラサキに興味をもち、対話を通して疑問や気づき生まれ、より細部まで観察する姿、複数の視点で比較・判断する姿など探究を深める過程に「科学する心」の育ちを顕著に読み取ることができます。特に、種として同じオオムラサキのオスとメスが、色も模様も相違することに着目し対話を通して、性の存在に気づき探究した過程も「科学する心」の本質を捉えています。

また、5歳児の事例では、「動物も傷つけずにイチゴを守る」ことに目的意識をもった子どもたちが、思考の深まりと共に、生き物を飼うことに伴う責任や、生き物は自然のままであることの重要性に対話を通して気づいていく育ちも省察されています。

そこには、友達や異年齢、保育者、地域の専門家や保護者との関わり、対話を豊かにする多様な環境の工夫が見えてきます。

中でも、ICTの活用においては、単にコロナ禍におけるコミュニケーションツールに留めず、視覚的共有や比較などから、未知の生き物と出遭う契機ともなり、子どものワクワク感を膨らませ、対話を深め、探究心をいかに発揮するツールとして提案されています。

保育者間の研究の積み重ねの中で、子ども同士の会話や表情までもよく捉えている記録の丁寧さと同時に、個々の事例の考察に留まらずさらにそれを構造化して分かりやすくまとめている点も特徴的であり、記述の工夫により、思考の過程をより深く読み取ることに繋がっています。

このように、主題「科学する心を育てる」保育と研究の創意工夫が他園の参考になる取り組みとして高く評価されました。